

第一章 松任谷由実

ユーミンの歌い手としての魅力

ひと声出しただけで世界を変える声

曲の世界観を伝えるということ

ユーミンの歌唱の魅力がわかる曲は？

七〇年代の特徴は、まっすぐな歌

八〇年代は、無機質な歌声

歌詞が聴きとりやすいのはなぜ？

曲のストーリーを疑似体験させるために

「守ってあげたい」の普遍的な魅力

九〇年代を代表する「春よ、来い」

ユーミンのコード進行の特徴は？

二〇〇〇年代になって生まれた、あたたかさ、
ライブに対するストイックな姿勢

第二章 吉田拓郎

吉田拓郎の歌は日本の音楽界を変えた
譜割りの崩し方と歌詞を伝えるパワー
シャウトがなければ、吉田拓郎ではない
反復が力強さを生む、その歌とパフォーマンス
安易な調和よりも、予想外の化学反応を
理想はバンドのボーカリストだった？
ミスチル桜井、桑田佳祐など、数々のフォロワーたち

第三章 時代を変えたパイオニア

井上陽水の甘く艶やかな声

透明感が異質だった小田和正の歌

山下達郎の歌唱は明るさや楽しさを強調する

色気があり華やかな矢沢永吉のボーカル

中島みゆきは情念の歌い手と言っている

第四章 八〇年代アイドル

八〇年代アイドル・ポップスの誕生

松田聖子の「陽」、中森明菜の「陰」

松田聖子の「しゃくり」はなぜ魅力的なのか

「瑠璃色の地球」に備わる、高い表現力と説得力

中森明菜のビブラートは恨みつらみすら表現できる

不安定だからこそ映える、斉藤由貴の歌の表情

第五章

男性ボーカル

「卒業」が何十年も愛されつづける曲になった理由

高音とビブラートが神々しい薬師丸ひろ子の歌

小泉今日子の歌にはキャラクターが表れていた

いま、もつとも優れた歌い手は玉置浩二である

シンブルな言葉を伝える緩急巧みな歌唱

強弱の使い分けが見事な「メロディー」

久保田利伸ほど楽しそうに歌う歌い手はいない

マイケル・ジャクソンと同じ匂いを放つ歌い手の登場

歌の細かい表情まで妥協しない平井堅

スガシカオには唯一無二の個性がある

槇原敬之は歌によってストーリーを物語る

徳永英明はなぜカバー曲の名手と言われるのか？

第六章

女性ボーカル

ギター一本と歌だけで世界を表現する森山直太朗
いつまでもフレッシュなゆずのハーモニー

異なるタイプだからこそ生まれるKinKi Kidsの魅力

玉置浩二に匹敵する、もつとも優れた女性ボーカルは？

MISIAが歌に込める、テクニクより大事なもの

宇多田ヒカルの歌には歌謡曲的な「泣き」がある

TKサウンドの時代を終わらせたのはだれか？

八〇年代アイドル以降に現れた女性ボーカルたち

吉田美和が響かせる、ふくよかな中低音

椎名林檎、aikoが作りあげる独自の世界

歌うことを論理的に追求する平原綾香

いきものがかり、Superflyが登場した〇〇年代後半

歌い手としても力の際立つ女優たち

第七章 歌い手を生かすプロデュース術

一青窈の独自性をどうやって見いだしたのか？

時間を費やして、ようやくたどり着いたデビュー

もったもった濃い曲が「もらい泣き」だった

作り手の思いを強く反映した反戦歌「ハナミズキ」

手寫葵の声は神様から贈られたギフトだと思った

JUJUのカバー曲は単なるコピーではない

『FNS歌謡祭』のコラボレーションを成功に導く方法

第八章 未来を託したいアーティスト

インターネットの時代に必要な自己プロデュース力

ボカロ曲を制作してきた米津玄師やYOASOBIの個性

Y O A S O B I の i k u r a と幾田りらは異なる歌い手

A d o はボーカロイドになりたかった

イメージ戦略はこれからの時代に欠かせない

藤井風ほど自由を感じさせるアーティストはいない

K i n g G n u の表現は高次元でアーティストイック

ヒゲダン・藤原聡の地声を強く張った高音

ミセス・大森元貴の高音が生む爽快感

川崎鷹也とT a n i Y u u k i の魅力的な声質

あいみよんの普遍性とアイナ・ジ・エンドの存在感

世間から飽きられてしまったときに

歌い手年表と武部聡志の仕事歴

図版レイアウト・年表作成／MOTHER

はじめに

これまで数限りないミュージシャンたちと仕事をしてきました。

音楽監督、作・編曲家、プロデューサー……関わる立場はさまざまです。

たとえば、松任谷由実まつとうやゆみさんのコンサートでは音楽監督を、松田聖子さんや斉藤由貴さん、薬師丸ひろ子さんの曲ではアレンジを、一青窈ひととようさんや平井堅けんさん、今井美樹さんの曲ではプロデュースを手がけています。

ハウスバンドのメンバーとしてキーボードを弾き、同時に音楽監督として演奏曲のアレンジを担ったのは、KinKi Kidsや吉田拓郎たくろうさんが出演した音楽番組『LOVE LOVE あいしてる』です。

それ以前にもテレビ番組で音楽監督を担当する機会はありましたが、プレイヤーとして演奏しながら曲もアレンジする、そのスタイルで音楽監督を務めたのは『LOVE LO

VE あいしてる』が初めてでした。

そして現在では同様のスタイルで『ミュージックフェア』や『FNS歌謡祭』の音楽監督を続けています。

ライブやレコーディング、テレビ番組を通じて、いままでに何人の歌い手たちと仕事をしてきたか？

きちんとカウントしたことがないので、正確な人数はわかりません。

でも一度も仕事をしたことのない人は、おそらくかなり少ないでしょう。

僕より年上の方でいうと、一緒に仕事をしたことがないのは矢沢永吉やざわさんと中島みゆきさん、それに小田和正さんくらい。

僕が音楽監督を務めるようになった二〇〇三年から現在まで、『FNS歌謡祭』にはのべ千数百組を超えるミュージシャンたちが出演してきましたそうです。

ということとは、他の番組やライブ、レコーディングを含めると、仕事をした歌い手の人数はだいたい二、三千人ほどになるでしょうか。一九八〇年代はとくに忙しく、本当なたくさんのミュージシャンたちの曲をアレンジしていましたから。

日本でいちばん多くの歌い手と共演した音楽家——。

だれが呼んだかわかりませんが、僕に対するその呼称はあながち大げさなものではないのかもしれない。

仕事を通じて僕がもっとも大事にしてきたのは、歌い手を生かすことです。

歌が主役。

ずっとそう考えてきました。

だから作・編曲家の仕事では、まず歌い手の魅力を見つけるところから始めます。

そしてその人の声質や音域、どの音域の声が伸びるのかなどを見きわめ、完成図を描いてから、逆算してアレンジや作曲を行います。

つまり最終的に歌がどう届くのかをイメージしてから、コードを選び、楽器の編成を考え、イントロは何小節かとか、間奏は何小節かとか、そういった楽曲の構成を決めていくんです。

どうすれば歌い手の声が魅力的に聴こえるのか？

どうすれば歌い手の言葉がはっきりと聴こえるのか？

どうすれば歌い手の伝えたいメッセージを届けられるのか？

あくまでもボーカルにフォーカスを合わせて、すべての選択をしているつもりです。

とはいっても、アレンジはただ単にボーカルを浮き立たせればいいわけではありません。歌の伴奏、いわゆるオケを整理して、音を少なくするだけではなく、ボーカルを前へ押し出すためのオケを考えることもある。オケによってボーカルに力を加え、その背中を押すんです。

イントロの作り方にしても、それがいかにキャッチーなものであるかと、ボーカルの登場感がなければ駄目でしょう。歌いだしたときに、ボーカルがどれだけ印象的に聴こえるか、それもイントロにおいては大事です。

ボーカルを食ってしまうようなアレンジは、アレンジ過多だと言えます。もしかしたら古い考え方なのかもしれませんが。でもそれが先輩たちから受け継いできた僕のやり方です。

なかでも大きいのは数多くのヒット曲を生みだした作曲家、筒美京平さんから受けた影響だと思います。

筒美さんとは、斉藤由貴さんの「卒業」や薬師丸ひろ子さんの「あなたを・もっと・知

りたくて」をはじめ、アレンジジャーとして何度もお仕事させていただきました。

筒美さんは、どんなメロディーなら歌い手の魅力がいちばん伝わるかを、つねに考えて作曲される方でした。あんなに多作だったにもかかわらず、歌い手ごとにメロディーや譜割りを変え、その人の歌にもっとも合う楽曲を作られていた。その流儀みたいなものを僕は継承しているつもりです。

プロデューサーとしての僕は、歌い手の声に加えて、その人の生きざままで——そう言うところとちょっと大げさかもしれませんが——楽曲に投影できればと考えています。

いくら繕ったとしても、どんな生い立ちか、どんな青春時代を過ごしたか、どんな音楽に影響を受けてきたかなどは隠せません。それこそがその人の本当の魅力ですよ。生きてきた道のりは、歌にも絶対になじみでるはずですよ。

だから歌い手の歌だけではなく、人となりをすべて理解することが、僕が思う理想のプロデューサーワークです。

その人とはまったく違う、虚像を作りあげるようなプロデューサーワークも否定はしません。純情可憐なアイドルが、裏では煙草を吸い、每晚お酒を飲んで……昔はそんなことが

あつたかもしれませぬね。

一過性の人気者を作りだすことが目的なら、それが虚像であつても問題ないかもしれない。でも長く音楽を続けていくためには、嘘うそについてはいけない。僕はそう考えます。歌い手のみならず、プロデューサーも同様です。嘘はいつか見透かされてしまいますから。

歌い手の魅力を考えて楽曲を作り、それが狙いどおりうまくはまれば、その分だけ伝わる力は強くなります。

いままで自分が手がけてきた曲のなかで、多くの人に伝わったという実感を持たせた曲のひとつが、一青窈さんの「ハナミズキ」です。「ハナミズキ」は一青さんの歌を生かし、曲のメッセージが伝わる方法を考え、アレンジとプロデュースを行った曲でした。おそらくそのさじ加減がよかつたから、たくさんの人に届いたのでしょう。

伝えたいことをちゃんと伝えるのは、やはり大事なことです。僕が大切にしてきたのも、派手だったり、キャッチーだったりするアレンジより、曲のメッセージや心情、歌う景色がちゃんと伝わるようなアレンジです。

そもそも一青さん自身が、伝える力に秀でた方でした。僕が四十年以上にわたり仕事を

してきた松任谷由実さんも、人並みはずれた伝える力を持つ方です。

優れた歌い手とは、いったいどんな人を指すのでしょうか？

これは一言では語りづらいことです。でも音程が正しく取れるとか、音量があるとか、またビブラートが正確だとか、そういったことではないでしょう。そのようなテクニクの部分は、もしかしてあとからいくらでも修正できるのかもしれませんが。

絶対に変えられないのは、持って生まれた声質です。

その声質を自分で理解して、生かす歌い方ができているかどうか。そして言葉を乗せて歌うときに、その曲の伝えたいメッセージを伝えられるかどうか。

その伝える力が、歌い手のいちばん大事なポイントだと思います。

いくら曲や詞がよかったとしても、楽曲の世界観を伝えられなかったら意味がない。ボーカルのうまさばかりが目立ってしまい、楽曲のよさに気づけないという場合もあるでしょう。

もちろんその逆のケースで、ボーカルがそこまでの力を持たないために、世界観を描けないこともありますよね。とくにアマチュアの場合は。

でも僕が出会ってきた人たち、長く一緒に仕事をしてきた人たちは、生まれながらに独特の声質を持ち、その声質を生かす歌い方を習得していました。なおかつ自分の作った楽曲でも、他の人が書いた楽曲でも、その曲の持つメッセージやテーマ、ストーリーを聴く人にちゃんと伝えることができました。

それこそが優れた歌い手なんです。

「うまい」歌い手と、優れた歌い手は違います。どれだけ高い技術を持っていても、メッセージを伝えることができなければ、その歌には魅力が感じられないはずです。

最近ではカラオケの採点機能を使い、音程や表現力、安定性などの項目に点数を付け、歌い手を評価する番組を多く見かけます。

テクニクを見るためなら、それも無意味なことではないでしょう。でも僕が出会ってきた優れた歌い手たちは、そういった項目では決して測れない、独自の魅力を持っています。

その筆頭格が松任谷由実さんです。そして吉田拓郎さん、松田聖子さん、中森明菜さん、あきな玉置浩二さん、たまきMISIAさん、一青窈さん、YOASOBIの*ikura* (いくた幾田りら)

さん、藤井風^{かぜ}さん、Mrs. GREEN APPLEの大森元貴^{もとぎ}さん……。

その歌声で聴く人の心を揺さぶる、さまざまな歌い手たちの魅力について、これから楽しく論じていきたいと思います。